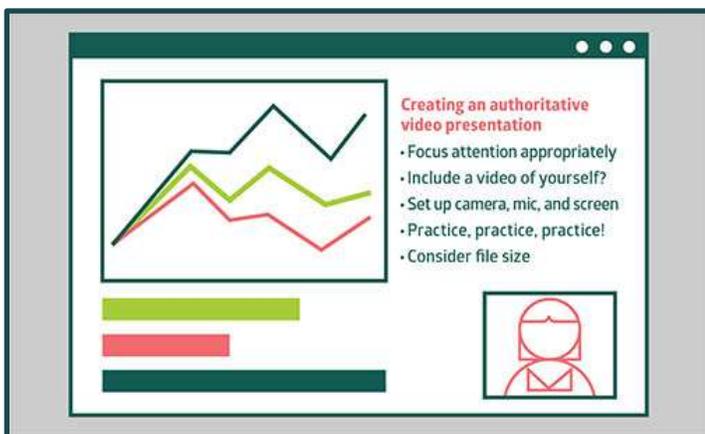


バーチャル会議・学会用のプレゼンテーションの ヒントと注意点： 聴衆を惹きつける説得力のある ビデオプレゼンテーション

Caryn Jones and Richard Bradly Harris

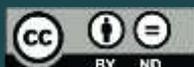
ThinkSCIENCE, Inc. | [Presenting](#)



バーチャルでの会議や学会は決して新しいものではなく、研究についての話し合いや結果の共有に利用したことがある方もいらっしゃると思います。しかしながら、COVID-19 パンデミックの影響で、多くの対面式のイベントがキャンセルまたは延期

され、バーチャルイベントへと移行する昨今、ビデオ会議プラットフォームやツールの使い方を早急に学ばざるをえなくなった方も多いことでしょう。

バーチャルイベントでは全てのセッションがオンラインで行われますが、そこでのプレゼンテーションはセキュリティーの高いウェブサイトからライブストリーミングされる、または前もってレコーディングされたものを再生することで、登録した参加者へと配信されます。ハイブリッド型のイベントでは、会場まで足を運んだ参加者に対して従来の対面式プレゼンテーションが行われ、その様子がライブストリーミングされたり、前もって録画されたビデオプレゼンテーションがオンラインで配信されたりします。



Copyright 2020 © ThinkSCIENCE, Inc.

This work is licensed under a [Creative Commons Attribution-NonCommercial 4.0 International License](#).

この特集では、前もって録画されたビデオプレゼンテーションを取り上げ、役立つヒントや注意点について説明します。

これらの情報は、大学の授業や講義をライブストリーミングする必要がある方にも役立つはずです。

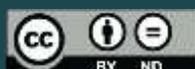
なぜビデオプレゼンテーションが行われるのか？

ビデオプレゼンテーションは、従来の対面式プレゼンテーションや、比較的最近行なわれるようになったストリーミングによるライブプレゼンテーションに完全に取って代わるものではありませんが、学会の主催者、発表者、そして学術コミュニティ全体に今までにない発表の機会を提供しています。その明らかなメリットとして、開催地までの移動により生じる費用および環境への負荷が低減されることや、多様な研究者とより広範に交流できるようになることが挙げられます。

また、ライブ配信よりも技術的な問題をコントロールしやすいことから、プレゼンテーションを前もってレコーディングすることを求める主催者もいます。2018年に開催された [1st IASC Virtual Conference](#) のように、ビデオプレゼンテーションが永続的にオンラインで閲覧可能なイベントも存在します。また、現在のウェビナーでは、ビデオプレゼンテーションを配信した後に、オンラインで参加者から寄せられる質問に発表者がライブで回答する形式がとられることも多いようです。

ビデオプレゼンテーションとは実際どんなものなのか？

この質問への回答は自明のようでもありますが、イベントによってガイドラインが異なることに気を付ける必要があります。プレゼンテーションの長さ（例、15分以内）、演者を映すかどうか、最初と最後のスライド以外に企業ロゴを入れてよいかなどなどの指針に加え、ファイルフォーマット（例、MP4）、アスペクト比（例、16:9）、画



面解像度（例、≤720p HD）、ビットレート（例、≤1 mbps）、ファイルサイズ（例、≤100 MB）などの技術的な基準が特定されることがあります。

一般的なツールを用いるインストラクションがイベントの主催者からも提供されますが、その他の有用な情報をオンラインで収集し、それを参考にしてビデオプレゼンテーションを作成するのも良いアイデアです。

ビデオプレゼンテーション作成のガイドラインを入念に確認してから、スライド作成、そしてプレゼンテーションのレコーディングに取り掛かりましょう。次の3項目についてのヒントと注意点を説明します。

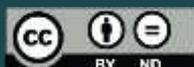
- **聴衆を惹きつけ、説得力のあるビデオプレゼンテーションを作成する**
- **ビデオプレゼンテーションをレコーディングする**
- **ビデオプレゼンテーションのエチケットを守る**

聴衆を惹きつけ、説得力のあるビデオプレゼンテーションを作成する

ビデオプレゼンテーションを作成する際のヒントや注意点の多くは、従来の対面型のプレゼンテーションと同様です（以前の特集記事「[プレゼンテーションの準備に役立つ5つのヒント](#)」および「[プレゼンテーションを効果的に行うための実用的な7つのヒント](#)」参照）。それに加えて、その分野の聴衆を惹きつけ、かつ説得力のあるビデオプレゼンテーションにするには、以下のことが特に重要となります。

聴衆の注意をどのように集中させるかを考える

ある1枚のスライドについて説明しているとしましょう。そこに示されている論理的な流れをわかりやすくするためには、コンピューターのカーソルや、使用するアプリケーションのツール（従来のプレゼンテーションにおけるレーザーポインターの役割を果たすもの）を用いて特定の情報を強調し、聴衆の注意をその部分へ向けさせます。



あるいは、論理的な流れに沿ってスライドの中の一部を順に表示していくという方法もあります（PowerPoint のアニメーション機能「アピール」などを使い、同時に複数個所をハイライトすることも可能）。この方法により、聴衆は、スライド上の他の情報に気を取られることなく、演者が示した重要なポイントにだけ集中するようになります。このように、目で見える情報と耳で聞く情報が一致するように演者がコントロールすることで、聴衆に重要ポイントを強調して伝えることができるのです。



レーザーポインターを使うときと同様に、プレゼンテーション中にカーソルを動かし過ぎないように気を付けましょう。たとえば、スライド上の強調したい場所までカーソルを動かして聴衆の注意を引いた後は、カーソルをスライドの外側に移動させます。カーソルをスライド上でぐるぐる回してさらに強調する必要はありません。

演者のビデオ映像を入れるかどうかを考える

ビデオプレゼンテーションには、演者の音声だけではなく、スライドに重ねた小さなウィンドウで、実際に演者がプレゼンテーションを行っている様子の映像を映すことができます。どちらが良いか迷った場合には、数枚のスライドで試してみるとよいでしょう。[PowerPoint](#) や [Zoom](#) などのアプリケーションを使うと、スクリーンにスライドを示しながら、演者自身の姿と声をレコーディングすることが可能です。

演者のビデオ映像を入れるかどうかは、スライドに含まれる情報の複雑さやレイアウト、また、プレゼンテーションのファイルサイズ制限などを考慮して決定する必要があります。



演者のビデオ映像を映す場合は、演者が話している姿だけを長い時間映すことは避けましょう。そうではなく、スライドを映しながら、その一角に重なるように配置したウィンドウに演者の映像を映すようにします。その際、ウィンドウで隠れる部分には情報を記載しないようにスライドを作成してください。

ビデオプレゼンテーションをレコーディングする

技術に頼る場合の常として、さまざまな技術上の問題に対処しなければなりません。

カメラを正しく設置する

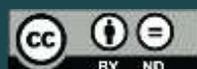
スライドと一緒に演者のビデオ映像も映すことにした場合、撮影をするときには、演者の正面像が画面中央に位置するように気を付けましょう（肩から上の映像で、目線が画面の中央に来るようにするのが一般的です）。適度な照明と目障りなものが映り込まない背景を使ってください。そして、自分の目の前にあるスライドを示すスクリーンの上部または前に撮影カメラを設置すると、カメラの方に自然に視線を向けた状態で、スライドを動かしたり、見たりしながら、プレゼンテーションのレコーディングと自分自身の撮影を同時にすることができます。



レコーディング用のアプリケーションにはバーチャル背景を設定できるものがあります。もし使用する場合には、学術プレゼンテーションにふさわしく、聴衆の集中を妨げないものを選びましょう。しかし、バーチャル背景の前で動くとき演者の輪郭がぼやけてしまい、聴衆の気を散らすことになりかねません。できるだけ実物の背景を使い、中央に位置した演者の後方に少しだけ背景が見えるようにするのがよいでしょう。中間色・無地の背景が無難ですが、実際の背景には、本棚、アートワーク、時計などが映り込むかもしれません。その場合には、きちんと整えて、聴衆の集中力の邪魔にならないように気を付けてください。

マイクを正しく設置する

外付けのマイクを使うか、カメラまたはイヤフォン内臓型のマイクを使うかにかかわらず、レコーディングを始める前には音量と音質をよく確認しましょう。マイクに近づきすぎると、ポップノイズやシビランスが起これ、録音したスピーチの明瞭さが損なわれるので注意が必要です。





- バックグラウンドにノイズ（都市部の交通音やサイレン音など）がある場合には、(1) レコーディングを一時停止し、ノイズが無くなったことを確認してからレコーディングを再開し、後から編集してノイズ部分を取り除く、または (2) ノイズが入ってしまった部分を別途レコーディングしなおし、その部分のみを編集して入れ換える、などの方法で対処します。いずれの場合もレコーディング環境をできるだけ再現し、音質が均一になるように注意してください。
- イヤフォンフォンとマイクが一体になったヘッドセットを使用する場合には、マイクが口に近づきすぎないように注意しましょう。近づくと、耳障りなポップノイズ（「p」や「b」などの発音の際に生じる衝撃風によるノイズ）やシビランス（「f」や「s」の発音の際に生じる摩擦音）の原因となります。

スクリーンを正しくセットアップする

レコーディング中、スクリーン上にはスライド以外の映像が映らないように気を付けましょう（たとえば、PowerPoint の「スライドショー」モードを使うとよいでしょう）。



- PowerPoint のアニメーション機能を使う場合には「スライドショー」モードにする必要があります。
- 質疑応答の際に、特定のスライドにジャンプしたい場合は「Esc」キーを押して「スライドショー」モードから一旦抜け出し、左側のナビゲーションウィンドウで目的のスライドを見つけて表示し、再度「スライドショー」モードに切り替えます。
- 複数のモニターを同時に使用している場合、レコーディング中のメインモニターが「スライドショー」モードになっていることを確認してください。



レコーディングの練習をする

レコーディングの練習ができるように、余裕を持ったスケジュールを立てましょう。まずは1分ほどの短いビデオを作成し、サウンドやビジュアルを確認します。これにより適切な音声レベルやプレゼンテーションのペースが分かります。また、レコーディングの一時停止や再開の操作にも慣れるでしょう。

ビデオレコーディングに詳しくない、または自分でプレゼンテーションしながらレコーディングを行うことに不安がある場合は、誰かにサポートを依頼することをお勧めします。そうすることにより、レコーディングに必要な技術面をマスターするというストレスがなくなり、プレゼンテーションの内容を吟味してスライドを作成し、それを用いて効果的にプレゼンテーションを行うことだけに集中することができます。

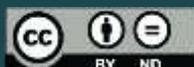
ThinkSCIENCE は、学会でのビデオプレゼンテーションや、大学でのオンデマンド形式の学生・教員向け教育ビデオの制作を行った経験から、効果的なビデオレコーディングのコツを心得ています。プレゼンテーションのビデオファイル作成についてのご相談を承りますので、必要な方はぜひお問い合わせください。

ファイルサイズを確認する

ビデオプレゼンテーションを作成する際には、ファイルサイズを確認しましょう。オーディオファイル（MP3 など）やビデオファイル（MP4 など）のサイズ制限を超過している場合は、ファイルを圧縮します。現在では、質を大幅に落とすことなくファイルを圧縮できるさまざまなツールが利用可能です。

ビデオプレゼンテーションのエチケットを守る

従来の対面式プレゼンテーションでの演者と同様に、ビデオプレゼンテーションの演者にもエチケットが求められます。



時間制限を守る

対面式、またはレコーディングしたものにかかわらず、プレゼンテーションを指定時間内にまとめることは、演者のプロフェッショナリズムや信頼性を示すことにつながります。

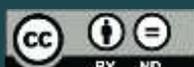
前もってレコーディングしたプレゼンテーションが、実際のライブイベントで配信される場合は、最後の質疑応答の時間までを組み入れた余裕のある時間配分になるように気を付けましょう（バーチャル学会の中には、質疑応答をオンラインメッセージシステムで行うものもあります）。

間違いに対して適切に対処する

間違いの全くない完璧なレコーディングをする必要はありません（何度もやり直しをする時間の余裕はないでしょう）。スピーチやスライドの操作を間違ってしまった場合には、すぐに「sorry」、「sorry about that」、「excuse me」などと言って訂正して、プレゼンテーションを続けください。どんなに経験豊富な演者でも、マイナーなミスをしてしまうことはあります。むしろコミュニケーションをする中で、それは自然なことでもあるので、録音中の小さな間違いであればその全てを編集して修正する必要はありません。

自然な語り口でプレゼンテーションをする

スピーチの際は自然な姿勢を保ち、マイクの方に前かがみにならないように心掛けましょう。演者のビデオ映像を入れる場合は、前述したようにスライドを映したスクリーンの正面に座り、カメラをそのスクリーンの上部（または前）に設置します。そうすると、カメラに視線が自然に向くので、対面式のプレゼンテーションの際に聴衆を見のと同じような効果が生まれます。プレゼンテーションの開始時と終了時には笑顔をみせ



ると聴衆の親近感を得ることができるでしょう。また、従来のプレゼンテーションと同じく、演者としてふさわしい服装でバーチャルイベントにも参加しましょう。



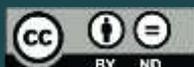
- 全スクリプトを読み上げると、早すぎる、または棒読みの説明になり、聴衆を飽きさせるばかりでなく、明確さや信頼性も損なわれてしまいます。その代わりに、スライドにはない重要情報を箇条書きや短い文章にまとめて覚えておくと、自然な口調でスライドを説明するのに役立ちます。
- ビデオレコーダーの中には映像確認のスクリーンが付いているものがありますが、演者をレコーディングする際は、そのスクリーンに映っている演者自身の姿に視線が移らないように気を付けましょう。スライドが映っているコンピューターのスクリーンの方（つまりカメラの方）を見るようにします。

まとめ

前もってレコーディングしたビデオプレゼンテーションを配信することは、自分の研究結果を多くの研究者と共有する機会となります。間違いがひとつもない完璧なビデオを作成する必要はなく、むしろ、明確に、正確に、かつ聴衆の注意をそらさないように情報を伝えることに注力しましょう。

ここに示したヒントや注意点が皆さんのお役に立てば幸いです。ThinkSCIENCEの[プレゼンテーションリソース](#)には[難しい質疑応答に自信とプロ意識をもって対処する方法](#)等の特集もありますので、ぜひご覧ください。また、プレゼンテーションについて質問のある方は、[こちら](#)からお問い合わせください。

この記事の最新オンライン版はこちら



Copyright 2020 © ThinkSCIENCE, Inc.

This work is licensed under a [Creative Commons Attribution-NonCommercial 4.0 International License](#).